

企画にあたって

わが国では少子高齢化により、労働力の低下と医療費の財源の膨張を来し、健康保険制度の破綻の危機にさらされています。また医療の高度化は、医療費をさらに高騰化させ、この危機に拍車をかけているのが現状です。しかしながら、医療はそれとは関係なく、絶えず進歩しています。したがって、高コストのロボット支援手術が、どこまで保険適用として認められるかが今後の大きな課題です。ロボット支援手術は、従来手術に比較して、大きなメリットがあることは誰しも認めるところです。そういう意味からも、国民のニーズとともに、医療の進歩に対応した健康保険制度の構築が求められるところです。

さて、先月号の「ロボット時代の泌尿器科手術①—前立腺癌に対する新たなスタンダード」に引き続き、今月号は、「ロボット時代の泌尿器科手術②—新たな術式への挑戦」というタイトルで特集を組ませていただきました。

現在保険収載にあるロボット支援手術は、前立腺癌に対する根治的前立腺全摘除術のみですが、海外では腎癌に対する腎部分切除術、膀胱癌に対する根治的膀胱全摘除術および尿路変向術が、多くの施設においてロボット支援下に行われています。特に腎部分切除術は、腎血管の阻血時間が術後の腎機能を大きく左右します。したがって、ロボット支援手術は、腎部分切除後の腎実質欠損部の迅速な縫合に適しており、わが国においても近い将来、保険収載が期待されています。また骨盤内での操作で行う膀胱癌に対する根治的膀胱

全摘除術は、根治的前立腺全摘除術と同様、非常にいい適応となる可能性があります。さらに膀胱摘除術後の回腸導管や回腸利用代用膀胱造設術は、より機能性が改善された尿路変向術が可能となるかもしれません。泌尿器科領域においては、悪性疾患のみならず、良性疾患に対してもロボット支援下に行われることが期待されています。腎盂尿管移行部通過障害に伴う水腎症に対する腎盂形成術、膀胱尿管逆流や神経因性膀胱などの小児泌尿器科疾患に対する尿路再建術は、細い縫合糸を用いて、手術用ロボットが持つモーションスケール機能により、より緻密で正確に行うことができます。女性の骨盤臓器脱に対する仙骨陰断端固定術も、ロボット支援手術のよい適応になる可能性があります。

本特集では、新しいロボット支援手術のパイオニアの先生方10人に、それぞれの術式と手術成績について執筆していただきました。いずれも今のところ保険適用外の手術ではありますが、健康保険制度のいかににかかわらず、ロボット支援手術の普及とともに、近い将来有力な手術オプションとなることは間違いありません。先月号の特集とセットでご活用いただき、今後の日常診療の参考にいただければ幸いです。

福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座
小島祥敬